

## 今週のメニュー

## ■トピックス

- ◇「ビニール業界若手経営者情報交換会」発足  
－PVC維新の会：PVC NEXT－

## ■随想

- ◇古代ヤマトの遠景（68）－【磐井の乱（1）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

- ◇「ビニール業界若手経営者情報交換会」発足  
－PVC維新の会：PVC NEXT－

今年1月25日に、西日本プラスチック製品加工協同組合の三原理事長の発案で、関西地区の若手経営者を中心とした「ビニール業界若手経営者情報交換会」が大阪府教育会館たかのガーデンで開催されました。その時に、東日本プラスチック製品加工協同組合の時田理事長から、「塩ビものづくりコンテスト2011と貯タンくんの製品化」の演題で、会員若手経営者7社の「貯タンくん」開発の経緯とその波及効果の説明があり、出席者の関心を集めていました。その次に、塩ビものづくりコンテストの事務局としてお声掛けさせて頂いた縁もあり、「軟質ビニール業界の現状とこれから」の演題で基調講演をさせて頂きました。

発足の趣旨は、「国際競争力の影響で国内生産が年々減少を続ける中であって、これから活躍しなければと願う若手経営者が危機感を共有し、業容の変革を含めた新しい時代に即した経営を模索するために、情報交換などを含めた素直に話し合える場が必要である」との思いから発案されました。

組合は、この会のアドバイザー、コーディネーターとして側面から支援し、会員は個々の企業の利益・メリットを求めるのではなく、今後、何をしていけばいいのかを会員全員で考え、会員同士の「ギブ&テイク」の精神で取り組むことが求められています。



河野社長

14社の若手経営者が集まり、熱心な議論の後に、代表として(株)河野プラテックの河野社長が選ばれ、会の運営規約も定められ、会の名称を「PVC維新の会」として、その思いをPVC NEXTのロゴで表されました。

発足後、熱心に飲みニケーションも交えて既に7回の例会が持たれ、上田服飾専門学校との産学共同など異分野交流を行い、PVC Design Award 2012の製品応募に向けた新たな協同テーマの立ち上げにも取り組んでおられます。

第7回例会は9月20日に開催され、久しぶりに参加させて頂きました。当日、幹事も含めて14名の方が参加され、「高周波加工技術に関する基礎勉強」をテーマに、山本ビニター(株)八尾工場を見学させて頂きました。丁寧なご説明と工場見学で、軟質PVCの高周波溶着技術から食品の解凍から医療機器の開発まで広く業容を広げておられる取り組みに一堂感心させられ、新たな会の出発に繋がった例会でした。



上田服飾専門学校との交流

今後も、この会が発展し、参加されている個々の企業が元気になり、新しいPVCの世界が広がって行くことを願い、支援を続けて行きたいと思っています。

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景（68）－【磐井の乱（1）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

#### <乱の顛末>

継体天皇に関する書紀の記述では、いわゆる「磐井の乱」と称される筑紫国造磐井の反乱事件が最も大きく取り扱われている。どのような事件であったのか、書紀の内容を要約すると次のようになる。

○継体二十一年夏六月、近江の毛野臣<sup>けなのおみ</sup>が兵六万を率いて任那に行き、新羅に破られた南加羅、喙己吞<sup>とくことん</sup>を回復しようとした。このとき筑紫国造磐井は、朝廷に対しひそかに反逆を企てており、このことを知った新羅は磐井に賄賂を贈り、毛野臣の軍を妨害するよう勧めた。そこで磐井は肥前・肥後・豊前・豊後を押さえ、外は海路を遮断して、高麗・百済・新羅・任那などの倭国への朝貢ができぬようにし、内では毛野臣の軍を遮った。そして毛野臣に対し

「今でこそお前は朝廷の使者となっているが、昔は仲間として袖を摺り合わせ、同じ釜の飯を食った仲ではないか。そのお前が使者となったからといって、にわかにお前の命に従うことは出来ない」と言った。

このことを知った天皇は、大伴大連金村・物部大連<sup>あらかひ</sup>麴鹿火<sup>こせ</sup>・許勢大臣男人らに詔して「筑紫の磐井が叛き西の国をわがものにしてはいる。いま誰か將軍の適任者はあるか」といわれた。彼らは「麴鹿火の右に出る者はありません」と答えた。

○八月、天皇は物部大連麴鹿火に詔して「磐井が叛いている。お前が行って討て」とい



岩戸山古墳（磐井の墳墓）の全景

われた。更に印綬を授け「長門より東は自分が治めよう。筑紫より西はお前が統治し、賞罰も思いのままに行え。一々報告することはない」といわれた。

- 二十二年冬十二月、大將軍物部麤鹿火は、磐井と筑紫の三井郡で戦い遂に磐井を斬り、反乱を完全に鎮圧した。
- 筑紫君葛子くずこは父（磐井）の罪に連座して誅せられることを恐れ、糟屋みやけの屯倉を献上した。

世に言う「磐井の乱」なるものの顛末は以上のようなものである。本当にこのような筋書きの反乱事件が発生したのかどうかは分からないが、これは史実として一般には受け入れられている。しかし、この書紀の記述には幾つかの問題点が含まれており、それらを切り口に、「磐井の乱」なるものの真相に迫ることにしたい。

そこで先ず、その問題点を整理してみることにする。なお、この事件発生の継体二十一年は、西暦五二七年に当り重要な意味を持っている。

- A この乱の記述の前提条件となっているものとしては、次の二点である。
  - ① 倭国が任那経由で支配していた南加羅と、喙己吞を新羅が破ったことから、倭国はこれを回復する必要があった。このような史実があれば毛野臣が兵を動かすに十分な理由があるといえるが、彼が兵を率いる以前の事件として、本当にこのような新羅の行動はあったのか。
  - ② 磐井は朝廷に対し反乱を起こそうとする野心があった。このような野心の存在が、新羅に付け入る隙を与えたとされており、二番目の前提となっている。しかし、磐井は本当にこのような野心を持っていたのか。
- B 毛野臣は六万もの兵を率いて筑紫に至るが、磐井に阻まれたとされている。そもそも六万もの兵を一人の責任者で率いることができるのか。
- C 天皇は磐井討伐に向かう麤鹿火に対し、極めて強大な権限を与えている。磐井が九州全体の支配者なら、その権限付与も理解できるが、磐井は主として筑前・筑後・豊前を支配していたと考えられ、その実態からすると麤鹿火に与えられた権限は強大すぎる。
- D 磐井が朝廷に対しての反逆者とするなら、息子の葛子くずこが屯倉(土地)を献上したぐらいで許されるのはおかしい。息子は打ち首、磐井の所領は全て没収が当然であるが、そのような記述はない。

## <半島情勢>

このような諸問題について以下に検討してみることにする。先ず、新羅の南加羅・喙己吞の収奪事件であるが、この問題に関しては朝鮮半島の歴史書『三国史記』を調べて見る必要がある。この『三国史記』は、「新羅本紀」・「高句麗本紀」・「百濟本紀」から成り、各国の歴史が編年体でまとめられている。高麗の宰相金富軾きんふしきによって、一一四五年に編纂されたもので、現存する最古の朝鮮正史とされている。

新羅の動向は、当然、百濟・高句麗、更には倭国の動向とも結びついており、この四ヶ国の六世紀前葉から中葉頃までの動きを年代順に整理すると次のようになる。

- 五〇三、新羅は、旧来の国名及び麻立干等の称号に替えて、新しく新羅国・新羅国王とした。
- 五一二、九月、百済は、高句麗に大敗  
是年十二月、百済の要請により、倭国は全羅南道の四県を百済に割譲する。  
(このときの四県割譲を主導したのが大伴金村であり、このことで、金村は、欽明元年(540)に失脚する)
- 五二二、加耶国王、新羅高官の娘を娶る。この結婚に新羅の陰謀が隠されていたため、両国の関係は悪化する。
- 五二四、新羅、南部国境地帯を超え、勢力を拡大。  
(新羅の南方制圧は、あまり大規模なものではなかったようであるが、喙己吞は、殆ど新羅に接していたために、このとき制圧されたと見られる)
- 五二七、筑紫国造磐井の乱。磐井は喙己吞・南加羅の建て直しに向かう近江毛野臣の六万の兵を阻止。新羅から賄賂を請けたとされる。
- 五二七(継体二十一年)、継体天皇崩御(古事記)  
(継体天皇の崩年には三説がある。このような崩年の混乱は磐井の乱と何らかの関係がある可能性があり、この点からの検討は後で詳述する。)
- 五三一(継体二十五年)、継体天皇崩御(書紀本文)  
(書紀の撰述者は、それまで五三四年とされていた継体崩年を退け、『百済本記』を紹介して、それに記載されている五三一年説をその崩年としている。なお、『百済本記』は『三国史記』の中の「百済本紀」とは異なる資料であり、今のところ現伝されていない。)
- 五三二、金官国が、新羅に投降  
(喙己吞と金官国は新羅に討たれたと書紀に記載されているが、この「新羅本紀」の記録から、金官国は投降したことになる)
- 五三四(継体二十八年)、継体天皇崩御(書紀割注)  
(書紀の原典が編纂されたときに、継体崩年はこの年とされていたらしい。)
- 五三六(宣化元)、那津官家を設置
- 五四〇(欽明元)、大伴金村失脚(五一二年の百済への四県割譲がその原因)
- 五四一(欽明二)、任那復興会議が百済の聖明王の提唱で開催された。
- 五四八、百済は、高句麗・濊連合軍に大敗、新羅に救援を仰ぐ。新羅は大軍を送る。
- 五五〇、百済と高句麗の戦いに乗じて、新羅は両国の城を取る。
- 五五四(欽明十五)、百済・加耶連合軍は新羅に破れ、百済聖明王は戦死した。このとき倭国は、兵一千、馬百匹を送った。
- 五六二、百済・加耶軍は新羅と戦って再び敗れ、このとき安羅にあった任那の官家も滅亡した。

以上が半島の諸国と倭国の関連記事である。次回以降、これらをベースに検討を進める。

(つづく)

「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

一気に秋になった感があります。「天高く馬肥ゆる秋」だったと思いますが、酷暑の為か、ニュースでは「熊下りる秋」になっているようです。ところで今週の月曜日は体育の日だったのですが、1999年までは10月10日でした。東京オリンピックの開会式にちなんで国民の祝日になったのはご承知のとおりですが、こんなに遅い開会式は、秋雨前線が去った後の東京地方の晴れの特異日だったからという説があります。特異日かどうかは異論があるようですが、晴天の日が多い季節であることは間違いありません。運動にはげみ、メタボ脱却の秋にしたいと思っているのは私だけでしょうか？（鈴蘭）

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)